

## 「図書」 雑感

教授 中川 皓三郎  
(真宗学)

この歳になって、自分自身の生きてきた過去を振り返り、自分自身が、どのような書物に出遇ってきたのかを考えてみることも意味のあることかも知れない。それらの書物との出遇いを通して自分自身を確認してみたいということがあるからである。もちろん忘れてしまった書物もあるわけで、少なくとも現在の自分自身に少なからず影響を与えた書物との出遇いをまとめてみようと思う。

私は、日本の国が敗戦後、連合国の占領下で民主国家として再生していく歩みの中で成長してきた。そして、そのことと無関係ではないのだが、私自身が生まれ育った家庭は、食べることができるかどうかということに最大の関心を寄せる家庭であったため、あまり書物に親しむという習慣はなかったように思う。

何歳の時であったかはもう忘れてしまっているが、クリスマスの時であったと思うが、プレゼントにヴェルヌの『海底二万里』の絵本をもらって読んだ記憶がある。内容は定かには思い出せないが、それ以来ヒーローに憧れる夢想癖が私の中にうまれてきたようだ。そして、ひょっとするとそれが一番最初に出遇った本であるかも知れない。

高校時代、大学受験の準備のため、てつぎの山寺で一夏を過ごしたことがある。その時、一緒に過ごした友人たちとの話し合いの中で、自分がどれほど本を読んでいないかを痛いほど知らされた。だから、大学に入ったら絶対に本を読もうと決意したことを今でも覚えている。ところが大学に入って、さあ本に親しもうとしたとき、私が読み出した本



は、太宰治の小説であった。そして、のめり込んでいった。大学に入って親しくなった友人から、お前の話口調や文章は、太宰ともうまったく一緒やないか。おもしろくもなんともないとよく言われたことを思い出す。

特に『人間失格』の主人公の「恥の多い生涯を送って来ました」という言葉が象徴しているように、太宰の作品からは、得体の知れない恐怖におびえながら、最後まで善い人であることを装って、悪人の自分を見切れないで破滅していく、弱い自分の姿を教えられた。

また、古本屋を歩き回って倉田百三の本を探し求めたことを思い出す。何冊か読んだ記憶はあるのだが、不思議なことに今になると何一つ覚えていないのである。ただ悩みながら真面目に道を求める生き方を教えられたように思う。そういう中で、大学生生活の最後のころには、高橋和巳の『邪宗門』に出遇い、それ以来、彼の小説を多く読むようになっていった。彼から教えられたのは、やはりまた苦悩の深さであり、誠実に悩むことの大切さであったように思う。

そして、ある先生との出会いを通して、キ

ルケゴールの『死にいたる病』とドストエーフスキイの『カラマーゾフの兄弟』とフランクルの『夜と霧』という本を教えられた。

デカルトが「私は考える、それ故に私は有る」と語る、この「私」を信頼して、我々が生きはじめるようになって、我々のところに得体の知れない恐怖が生まれたと言っていいだろう。私もまた近代以降に生まれた人間として、この得体の知れない恐怖におびえながら生きてきた。そのことをキルケゴールは「死にいたる病」と明らかにした。そして、この本の「緒言」のところで、キルケゴールは、新訳聖書のラザロの復活の物語を取り上げ、死んだラザロのもとにキリストがいることが、「ラザロは死んでしまっていた、けれども、この病は死にいたらないのである」と語っているが、そのことは、私の大きな問いになっていったように思う。また、この世の地獄を経験したフランクルが、「人が強制収容所の人間から一切をとり得るかも知れないが、しかしたった一つのもの、すなわち与えられた事態にある態度をとる人間の最後の自由、をとることはできない」と語る言葉に大きな刺激を受けた。そのことは、後になって読んだ本の中で、胃腫瘍で死の床にある一人の看護婦に、その現実を受け止めて絶望しないこと、そのことが「身をもって人の鑑になるチャンスだ」とフランクルが語る言葉と結びついて、生きることの意味を教えられたように思う。

京都で学ぶようになって、特に読むようになったのは森有正の著作である。『バビロンの流れのほとりにて』が最初の出遇いであるが、彼の石を刻むような思索に圧倒されながら、「内的促し」に従って生きることの大切さを教えられた。

まだまだ立ち止まって確かめなければならぬことが多くあるように思うのだが、何かこのような人たちの書物を通して、親鸞という人に出遇っていったように思う。

---